

「オールダースゲート」再考

岩本 助成

I 目的、概要、二つの留意点

小論は、ジョン・ウェスリの、いわゆる「オールダースゲート¹経験」を考察し、いくつかの問題提起を試みたものである。1738年5月24日夜、彼がロンドンのオールダースゲート街の小集会で経験したことは何であったか。**Aldersgate Reconsidered**²と題された論集が1990年に出版されたが、この課題はさらに考察されつつある³。本論において、ジョン・ウェスリとモラヴィア教会⁴との関わりを基軸にオールダースゲート経験を時期的に追い、三段

階に分けて検討する。

第1段階 オールダースゲート経験以前の挫折経験

第2段階 オールダースゲート経験について

第3段階 オールダースゲート経験以後の展開

本論に入る前に、二つの留意点を挙げておきたい。第一点は、オールダースゲート経験が伝統的に「回心経験」と解釈される場合、そこで言う「回心 (conversion)」とは一体、何を意味するのかという点である。伝統的な解釈が定着して行った「第19世紀欧米での回心概念」と、ジョン自身が「第18世紀イングランドにおいて理解して用いた回心概念」との間には、かなりの隔りがあるのではないかという疑問点である。

ジョン・ウェスリの第一次資料を調べて気付くことは、『説教』や『日記』において、回心という用語が余り多く用いられていない事実である。さらに、旧・新約の二巻の『聖書注解』においても、聖書66巻中の30巻を超える各書の注解で「回心」という用語を用いはするが、それらのほとんどが、「包括的な概念」として用いられている。即ち、「回心」は、「神への立ち帰り」の意味で用いられ、悔い改め、義認、新生、信仰、確信、確証などを包括する概念として用いられた。それゆえ、「義認や新生」と「聖化」とを峻別する神学的傾向を辿って行くジョン・ウェスリとしては、包括的な「回心」というこの用語は厳密性を欠くので、多用しなかったと思われる⁵。従って、第19世紀欧米でのリバイバリズムやホーリネス運動の影響を受けた回心概念を、そのまま第18世紀イングランドのジョン・ウェスリの回心概念に当てはめたり、読み込んだりしてはならない。

1742–2000, Epworth, 2003, p.2の統計表によれば、英国モラヴィア教会陪餐会員数は第18世紀中半には、約1,000名、1998年は2,073名（因みに、第18世紀半ばのメソジストの群れは約26,000名、英国メソジスト教会陪餐者は、1992年、458,773名、同年の国教会陪餐者は1,808,174名）である。なお、筆者は、Colin Podmore, *The Moravian Church in England 1728–1760*, Clarendon Press, 1998に多くを教えられた。ネット上で公開されているJ. E. Hutton, *History of the Moravian Church*も貴重な研究資料の一つである。

⁵ 拙稿「ジョン・ウェスリの神学的遺産——新生論をめぐる(2)」、『神学と人文』第33集、1993年、54頁。

¹ 古いロンドン城門の一つ、オールダースゲート(Aldersgate)から北に伸びる通り。慣用的にアルダスゲイトと表記されるが、現代英語の発音と、ロンドン市街地の一般的表記に基づき、オールダースゲートと表記する。

² Randy L. Maddox (ed.), *Aldersgate Reconsidered*, Kingswood Books, 1990.

³ 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年、45頁以下、100頁以下。清水光雄『ウェスレーの救済論』教文館、2002年、57頁以下、163頁以下。Randy L. Maddox, *Responsible Grace*, Kingswood Books, 1994, pp. 124–127, pp. 144–145, John Munsey Turner, *John Wesley*, Epworth, 2002, pp. 27–30, Kenneth J. Collins, *John Wesley*, Abingdon, 2003, pp. 86–104, Richard P. Heitzenrater, *The Elusive Mr. Wesley* (Rev. ed.), Abingdon, 2003, Chap. 20, 山内一郎『メソジズムの源流』キリスト新聞社、2003年、31–53頁。

⁴ 正式には「兄弟団 (Unitas Fratrum, Unity of the Brethren)」と呼ばれ、第15世紀のヤン・フスの改革運動に端を発するとされる。英国モラヴィア教会の最新研究書、G. & M. Stead *The Exotic Plant: A History of The Moravian Church in Great Britain*

第二に留意すべき点は、ジョン・ウェスリの『日記』(Journals)の性格、あるいは、特色についてである。渡米の航海日記やジョージア日記の一部は、ジョンからジェームス・ハットン (James Hutton) たちに送られ、ソサエティやその他の人々に読まれたと言う。そのような部分もあったが、彼の日記には別の特色があった。つまり、彼は、ある重要な出来事を「個別のメモランダム」の形で書き残しておき、『日記メモ (Diaries)』などとともに、それらを用いながら、後日、『日記』を編集して出版したのであった。特に、オールダースゲート経験を記した箇所は一連の長いメモランダムの形を取っており、2年後の1740年の日記公開の時まで手を加えられ続けたものである。

ジョンとチャールズの宗教経験や彼らの過激とも思える発言は、様々な風評と共に、彼らを案じる母スザンナや兄サミュエル・ジュニアの耳にも入っていた。情報を媒介した人々の考えや感想も付け加えられた結果、「不正確な情報」として伝わった。風評に害された母スザンナが、二人の息子を案じていることを知り、1738年6月8日、ジョンはソールズベリーに母を訪ね、自分が書き記していた長いメモランダムを読み聞かせてから、ドイツに旅立っていった。

ところが、翌39年6月13日の彼の日記には、スザンナがジョンの渡欧中に、ハットン家の子どもたちへのジョンによる感化を恐れたハットン夫人らしき人物が、長兄サミュエルに送った文書の写しを見せられ、上記と同じメモランダムであったにもかかわらず、その際同夫人のコメントなどから、母が再びジョンを案じ始めた事実を知ったと記している。「偏見ある説明から、ある人物や事件についての正しい判断を生み出すことはいかに困難なことか。」と、ジョンは嘆いている⁶。このような複雑な事情を知ると、5月24日の出来事をめぐるメモ文書が『日記』の中に編み込まれるまでに、約2年間の熟慮の期間が必要であった事情が分かってくる。

5月24日の経験を記した長いメモの部分は、日記第2部の冒頭部分に挿入され、「メソジストと呼ばれる人々」の熱い要望にこたえる形で、宣教と牧会

活動の一環として編集して出版に踏み切られた。

『日記』のこの部分が編集、出版された1740年代は、ジョンが大きな変動期に見舞われていた時期である。特に、モラヴィア派の静止主義 (stillness) との対立、及び国教会内のカルヴィニストの極端な予定説との対立を通じて、徐々に両者の信仰理解や神学的思想への批判を強めて行き、ウェスリ独自の神学思想と教会的、社会的な実践を形成し始める時期にあたる。1740年に発表した『日記』第2部の冒頭文書、および、1744年6月24日、ロンドンで記した『日記』第4部冒頭の「モラヴィア派教会への手紙」については後述するが、それらの文書を通して、自らとモラヴィア派との関わりの変遷を明らかにして行った。公刊された『日記』でのモラヴィア派に関する叙述をめぐっては、当然、モラヴィア派グループから反発や批判が起こった。逆に、メソジストの群れを形成していく人々からは「相手に配慮し過ぎる、慎重過ぎる」という意見が寄せられた。

さて、このようにして、その全貌を明らかにして行くオールダースゲート経験を、もし、山にたとえるなら、どのような山を思い浮かべるか。それは、決して低い山ではなかった。しかし、富士山のように単独で聳え立つ高山でもなかった。この経験は、ジョン・ウェスリの「長い霊的巡礼の旅路という連山」におけるすばらしい高山であったのだから、むしろ、ヒマラヤやアルプスの「連山の中の卓越した高峰」を思い描いて同経験を考えるべきではあるまいか。

II オールダースゲート経験以前の挫折経験

(1) 長い霊的巡礼の旅路の中で

筆者は、ロンドンの古地図や当時のオールダースゲート街ネットルトン・コートを描いた絵を見ながら5月24日の夜を想像する。ガス灯の出現以前のロンドンの町並みは、所々に吊り下げられたランプやロウソクの明かりがあるものの、かなり暗かったと思う。その夜、街の暗さよりももっと暗い気持ちで、重い足を引きずり、気が進まないまま、オールダースゲート街の小集会に赴く青年司祭ジョン・ウェスリの姿があったのだ。

⁶ John Wesley, June 13, 1739, Journals and Diaries II (1738–1743) ed. W. Reginald Ward & Richard P. Heitzenrater, vol. 19, The Bicentennial of the Works of John Wesley, Abingdon Press, 1990, p.68.

彼は、それ以前の2年間余り、生まれて初めて遭遇するきびしい挫折経験を味わっていた。父方、母方、共に、代々続いた聖職者の家系に生まれたこの人物は、幼い日から両親による優れた霊的な養育を受け、それらの訓育に従順であった。若い時代からの課題は、「どうすれば神に喜ばれる、きよく平安に満ちた歩みを果たし得るか。」であった。「聖化の神学と実践」から彼のキリスト教巡礼は始まったと言ってよかろう。

オックスフォード大学の名門クライストチャーチで、学士号、修士号を得た。貴重な信仰体験を経ながら、聖職者の道を歩み出した。父を助けた牧会経験の後で、彼はリンカン・コレッジのフェロー、及び、テューターに難関を突破して選出され、古典学、論理学、神学を講じつつ学生指導に当たる有望な大学教師となった。

オックスフォード大学内で、弟チャールズたちが始めていた霊的な学びのグループのリーダーとされ、第一次メソジスト運動と呼ばれ、ジョン自身が生涯、そこへの回帰を望んだとされるオックスフォード・メソジスト運動を指導した。聖書を第一にしながらも、教会の伝統、理性の賜物、および、「礼拝の厳守、聖餐の励行、聖書と霊的な読み物の学び、刑務所や病者の訪問の奉仕活動」などの実践をバランスよく重んじるこの運動は、もっと注目されてよい霊的運動ではあるまいか。

ジョン・ウェスリは、あらゆる点でエリート中のエリートであった。誰に対しても謙虚な人物であり、生涯にわたって敵となってくる者に対してさえ、寛容と友情を示して長年の交わりを止めなかったと言う⁷。その結果、後年には、かつて、攻撃の手を休めなかった教会や新聞雑誌界も、彼を講壇に招くようになり、好意的な論評を書き始めた。87歳で彼が召されたとき、彼を攻撃し続けた『ジェントルマンズ・マガジン』誌が惜しめない賛辞をささげ、「敵意と偏見の中を生き抜き、晩年になってから、あらゆる教派からあらゆる敬意のしるしを受けた稀に見る人物」と記したほどである⁸。

⁷ 1783年12月21日以降の『日記』を参照。訣別したマックスフィールド(Thomas Maxfield)を病床に訪ね20年の時を経て親交を回復している。

⁸ The Gentleman's Magazine 61 (1791), p.284.

(2) 大西洋上での嵐の経験とモラヴィア派信徒との出会い

ジョン・ウェスリが惜しまれながら大学を去り、弟や友人と共に、新大陸アメリカのインディアン伝道を目指して、宣教師(後に司祭)として、荒れ狂う大西洋に向け、わずか220トンの小船で出帆して行ったのが、1735年10月のことであった。

さて、ジョン・ウェスリがこの時期に味わった挫折経験を、二つに分けて考えて見よう。一つは、大西洋航海中での出来事であるが、航海中、彼がモラヴィア兄弟団の移民たちと出会ったことは『日記』にくわしい。ただし、この種の叙述を読む際には注意が必要である。彼は生涯にわたって、他の人々から深い感銘を受けると、感動の余り、過大視して叙述する傾向があった。他方、自分に対しては、強い悔い改めの念からか、自己検証と内省が過度に及ぶ場合が多い。一例を挙げよう。1738年2月1日の『日記』で、彼はジョージア時代を回想し、「ほかの人々を回心に導こうとして渡米したが、私自身が、神様に対して決して回心してはいなかった。」と記した⁹。しかし、40年近い年月を経た1774年版日記(Vol. XXVI)に付加した「正誤表」には、この箇所について「この点是不確かである(I am not sure of this.)」を加え、以前の過剰な表現を修正した¹⁰。従って、後年の正誤表での修正を考慮に入れずに、以前の文言だけでジョージア時代を判断してはならない。

ただ、彼がモラヴィア派の人々の死を恐れない平安に満ちた信仰生活と、自らのそれとを比べていたことは事実である。嵐のさなか、イングランド国教会聖職者であり、オックスフォード大学の教師でありながら、死を恐れて平安を失っている自分をきびしく見つめて責め、自分の不信仰に悩んでいる。

(3) ジョージア宣教での挫折経験

追い打ちをかけるもう一つの挫折経験は、ジョージア開拓者植民地における宣教上の不適応であった。この挫折は、ジョージア伝道での「失敗」というよりも、むしろ、彼の伝道と牧会における「不適応」と言った方が適切であろう。ジョン・ウェスリは、オックスフォード・メソジスト運動で培った高

⁹ John Wesley, Feb. 1, 1738, Journals and Diaries(1735–1738), p.214.

度な靈的訓練を、その水準を保持したままで、様々な問題を抱える移民たちの開拓教会に移植しようとした。そのような移植には様々な無理があった。若い牧会者ゆえの言動をほかにしても、「恵みの手段の厳守」など、彼が実践しようとした牧会実践は、移植先と移植方法とを誤り、結局、不適応に終わらざるを得なかった。

さて、これは『日記』全体について言えるが、読者は、書かれている文言に拘って一方的な解釈に陥らないように努めねばならない。たとえば、航海中、彼が死の恐れを抱いていたことは事実であったとしても、彼は嵐の中で、聖職者としての奉仕を懸命に励み、人々をよく指導している事実もある。それは往復の航海について言える。また、船に弱いと告白する彼が、ほかの船客に比べると、食欲や睡眠ともに良好である事実がある。船室を波が洗うようなしけの時さえ、彼は比較的によく食べて、熟睡している。それが自ら描くような死に戦く人物の日常であろうかと、彼の叙述を改めて検討せざるを得ない。

また、ジョンとチャールズをジョージアに派遣した宣教団体の側に、彼らに対する約束の不履行や不誠実さがあったことをも忘れてはならない。あるいは、ジョージア時代、彼は牧会伝道のかたわら、初代教父の書物をはじめ、多くの文献の読書に努め、モラヴィア派の讃美歌を多く訳して紹介するなど、後年の活動への良い備えをしている。また、同地の教区民のすべてが、ウィリアムソン (William Williamson) 夫妻のように、若い司祭に対して攻撃的であったわけではない。事実、ジョン・ウェスリが去った後、同地に赴いた友人ホウィットフィールドの『日記』には、偉大な先輩であるウェスリは教区民の間により評価を残していると述べ、その高い評価を汚してはならないと、自戒しているほどである¹¹。さらに注目すべきことは、彼が傷心を抱いて帰国した後も、海外宣教の志を捨てず、再び、アメリカに赴く計画を持っていた事実であろう¹²。

この時期に、大西洋上での嵐よりもっと激しい嵐が、彼自身の魂を吹き荒れていた。彼は自分のキリスト教を「おだやかな夏の宗教ではなかったか」と自己批判する¹³。幼い日からキリスト教の靈的な伝統の中で純粋培養され、ひたすら、きよいキリスト者像を追い求めてきた彼が、挫折によって倒れそうになりながら、必死に「キリスト者としての己の義」を守っていた。しかし、「あれもこれも守った式の信仰者の己が義」が、御前での安きに満ちた真の義ではないと気づき、「キリストの義に基づく信仰の確信に、新しく満たされること」を真剣に祈り求めていた。

(4) 帰国直後の状況

2年4ヶ月を経て、祖国イングランドに帰ったジョン・ウェスリには、選択できる二つの道があった。一つは、先に述べた「アメリカでの宣教に引き返す」道であった。ジョンや弟チャールズは、再渡米しようという意欲を抱いていた。たとえば、ジョンはアメリカを離れるに際して、「アメリカに別れを告げたが、御心であれば、これが永久の別れとならないように」と記した¹⁴。ジョンは帰英直後、自分がアメリカを去った事情を釈明することを願い、ジョージア評議員会に対して「単なる責任放棄ではないので、解任は正しくない」と弁明する機会を求めた。そのような考えは、上述の通り、後年、友人ホウィットフィールドに宛てて、自分自身の渡米計画を述べる手紙にまで一貫していた。また、チャールズも帰英直後の派遣団体との折衝において、以前のような「聖職者を無視した秘書の役目ではなく、一人の宣教師として派遣されるのであれば」という条件を述べて再渡米の願いを滲ませている¹⁵。従って、ウェスリ兄弟がアメリカでの伝道に失敗してイングランドに逃げ帰ったとする解釈は議論の余地を残す。彼らは、伝道・牧会における不適応な結果にも関わらず、アメリカ宣教の熱意に燃え続けていたからである。

1931, pp.183-184.

¹³ John Wesley, Jan. 24, 1738, *Journals and Diaries I (1735-1738)*, p.211.

¹⁴ John Wesley, December 22, 1737, *Journals and Diaries (1735-1738)* p.206.

¹⁵ Charles Wesley, February 15, 1737, *The Journal of the Rev. Charles Wesley, M. A.*, Baker Book House, 1980, pp.68-69.

¹⁰ Ibid.

¹¹ George Whitefield's *Journals, The Banner of Trust*, 1998, p.157.

¹² John Wesley, *Letters to George Whitefield (February 21, 1770)*, *The Letters of the Rev. John Wesley, A.M.*, Vol. V, ed., John Telford, Epworth,

第二の可能性は、オックスフォード大学リンカン・コレッジのフェローとしての彼が、もう一度、大学の教壇に帰る道であった。当時、大学側にそのような希望と期待が存在していたとしても、何の不思議もない。事実、**1751年6月1日**、彼がフェローの辞表をリンカン・コレッジに提出するまで、フェローとしての立場を堅持し、俸給も受け取っていた。ジョンのオックスフォードへの愛着は強く、度々、オックスフォードの町を訪れ、学生を同大学に同伴している。**1738年6月11日**、オックスフォードの聖マリア教会も彼を説教者として招き、同教会での彼の**10**回目の説教「信仰による救い」を行なわせている。しかしながら、ジョンは愛するリンカン・コレッジのフェロー、また、チューターとして専念する道に戻らなかった。そして、まったく新しい道、つまり、後年、福音主義信仰復興運動 (**Evangelical Revival**) と呼ばれるようになった「国内外の巡回宣教とメソジストの群れの形成」へと赴いて行った。

(5) 魂の混迷を見つめて

1738年直前の、二つの資料を検討したい。まず、彼の日記に挿入された文書である。**1738年1月25日**の日記に挿入された第一のメモランダムは、「わたしはアメリカヘインディアンを回心させるために行ったのだが、ああ、わたしを回心させる者は誰なのか。」から始まる¹⁶。さらに、「最後の糸を紡ぎ終えた時には、私はこちら側の岸辺で、死に絶えてしまうのではないかと恐れる罪を持っている¹⁷。」と歌うジョン・ダンの詩を引用した。彼は自分が貧しい人々を助けるための施しを行ない、試練や困難における神への服従を愛に基づいて実行し、信仰を実践によって示したと語り、「誰の目にも、わたしはクリスチャンとして映るであろう。」と自負するが、それらは死と向き合ったとき、無残にも消え行く類いの「己が義」に過ぎなかった。彼は死によって謙虚にされ、祈りのほかに慰めを認め得ないと述べる。

「第二のメモランダム」は、幼時からの霊的な状態についての省察から始

まる。「戒めを守れ、信仰を持って、希望を持って、愛を持って。それらを死に至るまで励め。」という歩み。カトリック的な外的行為の重視への警戒を教えられて来たが、他方、ルター派やカルヴァン派のように、信仰のみを最重要視することも、逆の極端に走ることになるのではないかと考えた。イングランド教会の師父たちに聖書と理性との一致を教えられ、聖書解釈の諸原則を学んだ、と述べる。神秘主義者の著作には、危険なキリスト教の注入を悟った、とも述べる。

続いて、「**1738年2月1日**の日記部分に収められたメモ」を読もう。哲学を学び、古典学や現代語にも精通した。神学も多年にわたって学んだ。霊的なことを流暢に語り得るし、すべてを施して来た。誰よりも多く働いてきた。しかし、それらの「信仰者の誇り、つまり、己の義」が神に受け入れられるか。希望はただ一つ。自分の義ではなく、信仰による神からの義を確信することにほかならない。キリストの功績だけによってもろもろの罪を赦され、主の愛顧へと和解させられたという信頼と確信を得ることである。ガラテヤ**2章20節**を心の底から告白し、聖霊の確証を自分の霊において与えられることである、と述べる。正にモラヴィア派の強調点である確信経験を求めて、心中の願いを吐露している。

もう一つの資料は、彼と同じような霊的渴望を訴えるオックスフォード以来の友人ジョン・ギャンボールド (**John Gambold**) に宛てた手紙である (**1738年5月24日**付け)。なお、ギャンボールドは、**1754**年、イングランド・モラヴィア教会の監督に就任した人物である。その手紙の中で、ウェスリは、律法がすべて聖であり、義であり、善であることを熟知しながら、主の栄光から落ちて御怒りにさらされているとの追及の声を聞くと述べる。だが、もう一つの声も聞こえる。「信じなさい。そうすれば救われる。」悲しいかな、聖霊の確証を自分の霊の中で知ることが出来ない。「今、ただあなたにだけ、よりすがらせて下さい。あなたに近づけ、自らを空しくして、信仰による平和と喜びそのもので満たしてください。あなたの愛から離れさせるものが、今も、また、永遠に何もありませんように！」と記している¹⁸。

¹⁶ John Wesley, Jan. 24 1738, Journals and Diaries(1735–1738), p.211.

¹⁷ 『対訳 ジョン・ダン詩集』湯浅信之編、岩波文庫、1995年、247頁。

¹⁸ John Wesley, Letter to John Gambold, Letters I, (1721–1739), The Works of John Wesley,

(6) ペーター・ベラーとの出会い

そのような信仰確信の模索のさなか、彼はモラヴィア派の一人物に出会った。同派の中でも、比較的穏健な考えの持ち主と思われるペーター・ベラー (Peter Böhrer) との出会いである。当時、モラヴィア派はイングランドに同派の教会を建設する伝道計画を持ってはいなかった。ベラー自身もほかの宣教師も、新大陸への船待ちの期間を利用して、イングランド国教会やオックスフォード大学の学生たちへの接近を試みようとしていたに過ぎない。英語が不得手な同派指導者たちの最良の助け手が、モラヴィア派への敬愛の念が篤いウェスリその人であった。彼はイングランド教会司祭であり、オックスフォード大学の優れた青年教師なのだから、同派にとってはすばらしい仲介者であった筈である。しかし、結果的に言えば、モラヴィア派は、ジョン・ウェスリという最適の指導者を同派に受け入れることに失敗して、大きな損失を受けたわけである。

ここで、モラヴィア派の信仰観を概観しておきたい。デューク大学のハイツェンレイター教授は、当時、ジョン・ウェスリが理解していたモラヴィア派の信仰観、または、確信観を以下のように要約する。(1) 信仰のみが、救いにとって必要なものである。(2) 善い業 (敬虔、または、憐れみの業) は、救い以前に要求されることはないし、事実、不可能なことである。(3) 信仰の力量 (degrees of faith) はない。ただ一つの厳密な意味での信仰があるだけで、弱い信仰とは、信仰ではなく不信仰にほかならない。(4) 厳密な意味での信仰は、直ちに明確に知られ得る「信仰の確信 (確証)」を伴う。(5) 確信 (確証) は、罪、疑い、恐れからの自由をもたらす。(6) 確信 (確証) は聖霊による全き愛、平和、喜びを伴う。(7) この確信 (確証) なしには、人はキリスト者ではない。(8) 確信 (確証) は、終わりの救いに至る忍耐 (perseverance) をもたらす¹⁹。

モラヴィア教会の最高指導者であるツィンツェンドルフ (Nikolaus Ludwig Graf von Zinzendorf)、ウェスリが激しく衝突し、モラヴィア派からも批判さ

れたモルター (Philipp Heinrich Molther)、上記のベラーや、ジョンがヘルンフートで出会ったダーヴィト (Christian David、または Dawid) などを比べて見ると、教理の理解や強調点において、相違があることに気付く。ただ、総体的に見るならば、ハイツェンレイター教授の要約が示すものと大きな違いはないであろう。

そこで、もし、このような信仰観が、当時、同派の信仰観であったとすれば、彼らが、ジョンの信仰は揺れ動く不確かなものであり、不信仰そのものと断じたとしても無理はない。ジョンの不信仰の原因は、心情 (heart) ではなく、頭脳 (head) つまり、神学や哲学の知的要素に偏り、行ないや恵みの手段をすぐに求めることにあるとされた。現に、ベラーは、ジョンたちが守る『祈祷書』の式文祈祷に困惑していた²⁰。規則正しく聖書を学ぶこと、祈祷書で祈りをささげること、礼拝と聖餐を厳守すること、貧しい人々や病人を助けること……。このような実践課題ばかりを口にするイングランド教会のエリート聖職者、ジョン・ウェスリ。

大陸において、一方においてカトリック的思潮と戦い、他方、領邦教会のプロテスタント正統主義が生み出し易い、教義の固定化と戦っていたこれら敬虔主義者たちの目には、ジョン・ウェスリがどのように映ったのか。キリストの義の転嫁のみに厳しく限定して信じ、そのほかの要素を切り捨てるという点において、ジョンは根本的に欠けていると判断されたのであろう。そして、行為義認の危険へと揺れ動く者として警戒されたのではあるまいか。モラヴィア派はジョンに同派が強調する「信仰の確信」を強く勧め、彼自身もそれを一心に追い求めるようになって行った。

III オールダースゲート経験について

1738年5月24日夜、オールダースゲート街の集会で、ジョン・ウェスリに一体、何が起こったのか。24日に先立つ5月21日 (ペンテコステ) に弟チャールズが受けた経験について、ジョンは日記に「わたしは弟がその魂に安

vol.25, ed. Frank Baker, Abingdon, 1980, pp. 550-551.

¹⁹ Richard P. Heitzenrater, *Mirror and Memory*, Kingswood Books, 1989, p.146. なお、同論文は Randy L. Maddox (ed.) *op. cit.*, pp. 88-89 にも収録。

²⁰ Colin Podmore, *op. cit.*, p. 33.

き (rest) を得たという驚くべきニュースを受け取った。その時から、彼の身体的な強さも回復した²¹。」と記した。チャールズ自身は、「今、わたし自身が神と和らいだことを見出し、キリストを愛する望みを喜んだ。……わたしは信仰に立った。……自分自身の弱さを尚も覚えつつ床についたが、……キリストの御守りを確信していた。」と記している²²。

ジョンは自らのオールダースゲート経験を、「信仰の確信に満たされた (an assurance was given me)」と記した²³。ただ、この時点ではモラヴィア派への傾倒を強めていたジョンとチャールズが、その後、ほかの友人たちのようにイングランド国教会を離れてモラヴィア教徒になる道を辿らなかった事実注目しておきたい。確信経験を与えられたことは素直に感謝しながらも、この恵みの経験を契機にしてジョンは、独自の神学的検討を深め、新しいメソジスト・ソサエティを中心にした伝道、牧会運動につとめ、彼が生まれ育てられたイングランド国教会の伝統の新しい批判的継承につとめて行ったのである。

その夜のオールダースゲート街集会で、ルターの著作が朗読されていたが、その集会は「モラヴィア派の集会」ではなかった。第 17 世紀に比べると減少傾向にあったとは言え、当時のロンドン市内には、イングランド国教会だけで 30-40 ほどのソサエティ集会有った。オールダースゲート集會も国教会のソサエティの一つであり、当時、国教会員で「聖書と太陽 (The Bible and Sun)」という本屋を営み、ジョン・ウェスリを敬愛していたジェームス・ハットン (James Hutton) が中心的存在であった。ジェームスが、後にモラヴィア派に加わったため、オールダースゲート街集會が既にモラヴィア派の集會であったかのように誤解されたのかも知れない。

この国教会の集會に、ジョン・ウェスリはまったく気乗りしないままで出席した。ホランドというペンキ屋を営む国教会員が、ルターの『ローマの信徒への手紙序文』を朗読していた。この書物の内容は、感情的興奮を覚えさせるようなものではない。しかも、ジョンはその後、ルター神学に傾倒せず、

後年、ルターの著書に厳しい批判を浴びせたほどである。従って、以下におけるジョンの叙述は、それが人間的要素から出た業ではなく、まさしく聖靈なる神の御働きであったと讚美せざるを得ない出来事だったことを示している。

「9 時 15 分前ごろでした。キリストを信じる信仰を通して、神が心の内に働いてくださる変化について、彼が述べていたとき、わたしは、全身全霊 (heart) がいつもになく燃やされるのを覚えました。そして、わたしがキリストを、救い主であるキリストのみを信じたことを悟りました。また、キリストが、わたしの罪を、こんなわたしの罪でさえ、取り去ってくださり、わたしを罪と死の律法から救い出してくださったとの確信が、わたしに与えられました²⁴。」

この確信は、ジョンが主日ごとにささげていた国教会『祈祷書』の聖餐祈祷文を用いて言えば、「自分自身の義によらず、ただ主の限りない憐れみによって」、主御自身による「罪と死からの救いの恵み」を新たに確信した恵みであった。

チャールズの日記には、オールダースゲート街ネットルトン・コートから街角を回った、リッル・ブリテンのブレイ宅のチャールズのもとへ、同夜、10 時ころ、ジョンが友人たちとやって来た、とある。ジョンは「わたしは信じる！」と叫び、チャールズが前日に作った讚美歌「わが魂は、いずこにさ迷うか。われはひたすら神を仰ぎ慕うのみ」を歌って、共に感謝の祈りをささげたのであった²⁵。

後年、ジョン・ウェスリは、信仰のこの確信を「しもべとしての信仰から、子としての信仰」へ、あるいは、「聖靈の確証とわたしたちの靈の確証」と言い表すようになる。特に、彼がよく用いた後者の表現は、ローマ 8:14-17 の聖句であり、聖靈御自身とわたしたちの靈とがはっきりと分けられている点と、聖靈御自身が、わたしたちがどんなに逃げたとしても、避けたとしても、わたしたちの靈そのものに対して、「神の子としての確信を必ず満たしてく

²¹ John Wesley, May 21, 1738, *Journals and Diaries (1735-1738)* p.241.

²² Charles Wesley, May 21, 1738, *op. cit.*, p. 92.

²³ John Wesley, *Ibid.*, p.250.

²⁴ John Wesley, May 24, 1738, *Journals and Diaries (1735-1738)* pp. 249-250.

²⁵ Charles Wesley, May 24, 1738, *op. cit.*, p. 95.

ださる」という恵みを表わしているのである。

上記の経験は、ジョンが、その後のモラヴィア派との確執に苦しみつつ、2年間の熟考期間を経て、自身の霊的な巡礼を記した「長いメモランダム」の中で叙述されたものである。ペーター・ペーラーは、ジョンが知的に過ぎ、恵みの手段などの業に固執していると批判した。また、恵みにおける「漸進的变化」は認めても「瞬間的な変化」に対してはあくまでも懐疑的な態度を取るジョンに困惑した挙句、ペーラーは何人もの「瞬間的な変化の証人」を彼に引き合わせている。「動揺している信仰、弱い信仰などは存在しない。それは不信仰そのものである。」として、ジョンが信じようとする「信仰の度合い、信仰の程度の存在、弱く幼い信仰も信仰である。」という考え方を受け入れようとしないうモラヴィア派の確信観であった。後年、同派への敬愛を示しつつも、ジョンは、やはり、この確信理解を聖書の真理から批判するようになって行くが、5月24日の時点では、モラヴィア派の信仰理解や確信理解に立って、自らの確信経験を理解しようと努めていた。そして、このような確信を継続することが出来ないことに悩み、モラヴィア派の信仰理解、確信理解そのものに対して強い疑問を抱かざるを得ないようになって行く。

このように、信仰の確信をめぐる問題点はすぐに出てきたものの、当時のジョンにとっては、同派の理解に基づいて「なんじ、なお一つを欠く」と、厳しく鋭く指摘されたことは大きな益であったと言えよう。ジョンもチャールズも、長い間、国教会の「教理への同意としての信仰」の伝統に育まれて来た。また、「信頼としての信仰」の伝統をも吸収して来た。その上、彼は、神学や古典学などの学問的な関心、霊的な生活や種々の博愛活動など、多くのものを有していた。しかし、今、モラヴィア派の信仰の伝統、確信の伝統を通して、魂の奥底で正直に感じ取っていた「何か欠けている」という実感が顕在化したのである。

確かに、ジョンの確信経験は、チャールズのそれと異なっている。当然、ダマスカスの使徒パウロの回心とも、ミラノでのアウグスティヌスの回心経験とも、ルターのいわゆる「塔の経験」とも、カルヴァンの回心とも異なる。つまり、聖霊なる神の御働きは多様なのであって、ある種の信仰理解や確信経験を絶対化したり、ほかの人々のそれと比較したり、ましてや、互いの恵

みの経験の真偽を論じたりすることは厳に慎むべきことである。ジョンはオールダースゲート経験の数ヶ月後に記した手紙の一節でこう述べている。

「この確信というものは、ある人には、より小さな程度で、ほかの人々にはより大きな程度で、ある人々には瞬間的に、ほかの人々にはずっと後になってから、神の御心に従って与えられるものです。しかし、確信はすべての人々に約束されているものですから、それを熱心に求めるかぎり、すべての人々に必ず与えられると信じて疑いません²⁶。」

このようなウェスリの確信観が、モラヴィア派の考えに適合する筈はなかった。ジョンはオールダースゲート経験後も、確信の動揺に苦しみながら、「信仰の確信とは何か。」をさらに追い求めていく。そこで注目すべき点は、ジョン・ウェスリ自身が、一度たりとも、自分の確信体験をメソジストの群れの規範、あるいは、模範としたことがなかった事実である。また、モラヴィア派の信仰に強い感銘を受けつつも、結局は、モラヴィア派の一員にはならなかった事実である。では、なぜ彼は母教会への忠誠を貫いて、ほかの人々のようにモラヴィア派に加わって行かなかったのか。そのような問いを、オールダースゲート経験以後の彼の歩みから検討することにしたい。

IV オールダースゲート経験以後の展開

モラヴィア派が教える意味での確信に立ち続けたいと願うジョンとチャールズであったが、実際には、その確信は揺らぎ続けていた。オールダースゲートから4日目の5月28日、ハットン宅で、ジョンの口から、突然、「わたしは今までは、キリスト者ではなかった。」という過激な発言が飛び出した。この発言をめぐって激論が戦わされたと言う。息子たちを案じた母スザンナは、チャールズへの手紙の中で、彼に確信経験を与えてくださった主に感謝しながらも、上記の議論での極端な考えを静かに戒めて以下のように記している。

「……わたしは、わたしたちの回心の正確な時を知ることが、わたしたち

²⁶ John Wesley, To Arthur Bedford, Sept. 28, 1738, op cit., p. 564.

にとって必要であるとは判断していません。心臓 (heart) にもたらされた聖霊の実によって、わたしたちが死からいのちへ移されたというはっきりとした希望 (a reasonable hope) を与えられているなら、それで十分だと思います。悔い改め、信仰、希望、愛……などと呼べるものです。主の御働きは様々であり、様々な気質の者の上に、様々な方法で働いてくださいます。再生の御業が始まったら、直ぐに完全になるようなものではありません……

わたしは、あなたが考え方で少し変な道へと落ち込んでいると考えます。あなたは、二、三ヶ月前までは霊的ないのちを持たず、義とする信仰を持っていなかったと言っています。さて、これは、大人になった人が子どもの時には生きていなかったかのように主張するのに似ています。子どもの時には生きていたことを知らなかったからだと言うのです。これは変な考え方です。霊的ないのちと自然的ないのちとを、類比できると思いませんか。人は先ず生まれて嬰兒期、幼児期、青春期を経て成熟に至ります。……霊的な強さも聖霊の御働きであると共に、時間の中でなされていくのです。お手紙をすべて読んでわたしが悟ることは、今はそうではありませんが、ついこの前までは、あなたがキリスト者であることに、今ほどの充実を得ていなかったということではないでしょうか。わたしはあなたがキリストによって神の憐れみを強く生き生きと望み見ることに達していることを心から喜んでます。わたしはあなたが以前は救いの信仰をまったく持たずに生きていたなどと、到底、考えることが出来ません。一方において信仰を与えられていることがあり、他方において、与えられている信仰を生き生きと意識できることがあるということではありませんか²⁷。……」このようなチャールズへの忠告は、また、母からジョンへのそれであったことに間違いはない。

さて、ジョン・ウェスリはオールダースゲート経験から 20 日余り経った 1738 年 6 月から 9 月にかけて、約 4 ヶ月間、「モラヴィア教徒の本拠地ヘルンフォート」へと憧れの旅に出た。海路、オランダにわたり、ライン河を遡って進む、徒歩や船旅を交えた旅であった。優れた指導者たちに会うことが出来たし、退修の祈りの旅から多くの収穫を得た。彼はその生々しい感動を

家族などに書き送り、また、『日記』に、聴くことを許された説教の内容、指導者たちとの出会い、教団組織、礼拝式や教徒たちの生活の模様、さらには、ケルン大聖堂の悪印象など、旅行での率直な感想を記している。

他方、この時期以降、内的に深まるモラヴィア派に対する疑問や批判を、ジョンはどうすることも出来なくなっていた。そして、従来のモラヴィア派への傾倒を徐々に改める神学的な省察を深め、それに基づく伝道と奉仕活動へと、新しい展開をとげて行くことになった。

この新しい転換を象徴するような出来事が、7 月 4 日、ライン河をケルン、マインツ、フランクフルトと進んだ後の、マリエンボルン (Marienborn) において起こった。しかし、不思議なことに、ジョンはこの出来事を日記のどこにも記していない。ただ、ハットンの『モラヴィア教会史』第 2 巻 9 章を読むと、モラヴィア派の資料からこの経験を詳しく知ることが出来る。

それは同行の友人インガム (Benjamin Ingham) には許されたが、ウェスリに陪餐が許されなかったという出来事であった。ジョンは、モラヴィア教会から「疑いを抱いているために平安がなく、休みなく揺れ動いている信仰者であって、聖餐を受ける資格がない者 (homo perturbatus)」として陪餐を拒否されたのである。もともと、聖餐を軽視し、無視するような人物であったならば、それは取るに足らない出来事であったろう。しかし、生涯にわたって彼ほど聖餐を重視し尊重した人物も少なかった。その彼が、礼拝において陪餐を拒否されたのであるから、彼にとっては一大事であったと思われる。

彼はそれを個人的な出来事と考えなかった。聖餐の卓に進み出る相手を、「疑いによって揺れ動く信仰者」と断じて、主の晩餐への陪餐を拒否するキリスト教とは、一体、何なのか。弱い信仰者に対してこそ、主の晩餐への招きと慰めとはあるべきではないか。恵みの手段は、このような状況の者にこそ、尊ばれるべきではないのか。つまり、ここで一切の基準とされている「信仰の確信の有無」とは、一体、何であろうか、ということにほかならない。

ジョンは、礼拝でのこの出来事が、神学的な根本問題を新しく自分自身に突きつけた出来事であると受け止めたと思われる。日記の一節に書き留めて終わってしまうには、余りにも大きな神学的重要性をもつ出来事であったからであろう。以後、約 2 年にわたるイングランドでのモラヴィア派との論争

²⁷ Charles Wallace Jr., Susanna Wesley, Oxford Univ. Press, 1997, pp.175–177.

や葛藤の中で、彼の内に熟成されつつあったものが何であったかを、『日記』に編集されている二つの文書から裏付けて考えたい。

第一の文書は、**1740年9月29日**付（約**2ヶ月**前の**7月20日**に、ジョンと十数名の信徒は、フェターレイン・ソサエティから離脱した。）のもので、『日記 第2部（**1738. 2.1**–**1738. 8.12**）』の序文として編まれた文書である。大意は以下の通りである。ソサエティ内のジョン・ウェスリのグループとモラヴィア派グループとの葛藤の真相は、一体、何であったのかを教えてくださいという求めがあった。果たして正しく理解してもらえるかどうか疑問であるが、恵みの光を輝かすために敢えて記すことにしたい。もし、人が「モラヴィア教会は、傷もしみもない教会か。」と問えば、「そうではないが、忍耐を通して、完全に申し分なく、何一つ欠けたところがない教会とされることを信じる。」と答えたい。もちろん、神は彼らの中だけに臨在されるのではなく、イングランドにも臨在される。神を探しにドイツやオランダに行く必要はない。今日のような両者の交わりがなかった時期に、神はわたしをイングランド教会とモラヴィア教会との交流を開くために用いて下さった。

1738年9月、ドイツから帰国して、わたしはキリストの血潮を信じることによる偉大な救いを伝えた。同時に、それは、神のすべての戒めを守り、機会あるごとに、すべての人々に善を施しながら待ち望むべき救いでもある。ところが、翌**39年9月**ごろ、わたしたち兄弟の不在中に、第一点、「疑いや恐れを少しでも持つ者、清い心を持たない者は、義とされる信仰を持っていない者」と断じる者たち、第二点、「恵みの手段を否定しないと真の信仰を持つ者ではない」と、信仰の静止主義に陥る教えを主張する人々が、わたしたちの群れ（フェターレイン・ソサエティ）の中に大きな混乱を呼び込んだ。解決の責任はわたしにあると判断した。しかし、モラヴィア派の人々は、人は疑いや恐れからまったく解放されなければ、また、厳密な意味で新しい清い心を持たなければ、義とされる信仰に達することは出来ないと主張した。疑いや恐れを排除する前には、恵みの手段を守らなくてもよいと主張したのである。

しかし、わたしは彼らに答えたい。あらゆる恐れ、疑いの解決の前にも、「ある程度の信仰」を得ることが出来る。新しい清い心を得る前にも、神の

戒め、特に、聖餐を守るべきである、と。実は、この真理を、わたしはイングランド教会からだけではなく、モラヴィア教会からも学んだのである。だから、もしわたしの考えに誤りがあるならば、訂正と説明を与えてほしい。このように願ってこの文書は結ばれている。

第二の文書は、『日記 第4部（**1739.11.1**–**1741.9.3**）』の冒頭に編み込まれた一通の手紙で、**1744年6月24日**（因みに、ロンドンのファウンドリ会堂において翌**25日**から数日間、第**1回**メソジスト年会在開催された。）に書かれたものである。『モラヴィア派教会への手紙』と題され、現在、イングランドに住んでおり、また、将来、住むと思われる同派聖職者に宛てて記した手紙である。前掲の文書から**3年**の年月を経ており、新しく出発したメソジストの群れも、最初の年会在を開いて群れとしての形成活動を展開し始めた時期に記された手紙である。ウェスリは、この機会を捉えて、イングランド・モラヴィア教会に対して暖かい友好の手を差し伸べようとしている。彼は、先ずこの手紙を書くに至った動機を述べる。イングランドにおいてモラヴィア教会を正しく紹介した文書がないので、イングランド内の多くの読者のためにも、モラヴィア教会が自らを知らせるためにも、教会一致の精神に溢れて自分がペンを取ったと述べる。ウェスリは同派の和解の福音、義認の原因としての恵み、義認の条件としての信仰を高調する教義的卓越性を称え、教会のかしらなる主キリストを讃美する。モラヴィア教会の信条の優秀さと、同教会の実践をも高く評価している。

しかし、もしそのように優れたモラヴィア教会を認めるのなら、あなたは、なお、何を彼らに求めるのかと、問われるかも知れない。実は、互いの間には多くの出来事が起こり、激しい討論を経てきた。しかし、ここではあくまで友好的でありたいので、表現に留意し配慮をもって、その点に触れることを避けたい。同教会を、いわゆる無誤謬なラビと称えるわけには行かないが、少なくともこのわたしよりも善良で賢明な人々と申し上げたい。わたしの誤りを示していただけるならば、訂正することに吝かではない。同教会のご加禱を乞いたいと結ぶ。

この手紙は、『日記』第4部全体において明らかにされてくるモラヴィア派との軋轢の数々を人々が読み始める前に、序文の形で収録されたこの手紙を

通して心を和らげることを願ったものと思われる。ジョン・ウェスリの牧会者としての細やかな愛と配慮の深さに教えられる手紙である。

すでに、ハイツェンレイター教授が要約した「モラヴィア派の信仰確信観」の8項目を挙げておいたが、同教授は、更に、これらの確信理解と、ジョン・ウェスリの後年の理解とを比較しながら論じている²⁸。つまり、モラヴィア派の理解からすれば、オールダースゲートに至るまでのウェスリの霊的な状況は、上述の第7項、「確信（確証）なしには、人はキリスト者ではない。」によって促されていた。また、第5～6項、すなわち、「確信（確証）は、罪、疑い、恐れからの自由をもたらす。」と、「確信（確証）は聖霊による全き愛、平和、喜びを伴う。」も、ジョンの内的な緊迫を呼び覚ますものであったと言う。

では、オールダースゲート経験は、これらの課題と取り組むジョンの問題をすべて解決したであろうか。決してそうではなかった。彼は、罪、疑い、恐れからの自由を求め、全き愛、平和、喜びに満たされることを求め続けて、彼の確信経験後も、数ヶ月間、厳しい自己点検を繰り返した。しかし、いつも同じ結論に達するだけであった。「自分はモラヴィア派の人々がいう意味での聖霊の実を結ばず、疑いや恐れから自由になれず、恵みの手段への努めを捨て切れない。従って、真実な意味でのキリスト者でない。」当時のジョン・ウェスリがいつも達するのは、そのような結論であった。

しかし、その後、1740年に至るまでの約2年間に、マリエンボルンでの経験で気付いたような「モラヴィア派の神学的立場への根本的な疑問点」と取り組み始め、彼自身の神学的な考え方を大きく転換して、独自の考えの形成へと進んで行った。その結果、1740年の夏頃には、モラヴィア派の信仰観の第1項、「信仰のみが、救いにとって必要なものである。」以外の各項目には同意できなくなっていた。以後、ウェスリが強調するに至った点は、以下の諸点であった。

(1) 聖書から見ても、教会の伝統から見ても、群れの人々の経験から見ても、信仰の度合い（degree, 程度、力量）というものは存在する。(2) ま

た、確信（確証）の度合いも存在する。(3)「恵みの手段」は、確信に先立っても奨励されるべきものである。(4) 義認は、必然的に確信を生むものとは言えない。(5) 義認の確証は、必然的に疑いや恐れからの完全な自由をもたらすものではない。(6) 義認の確証は、必然的に全き愛、平和、喜びをもたらすものではない。(7) 信仰の確信は、十全な救いそのものではない²⁹。

もし、同教授が論じるこのような解釈が、ウェスリ自身の解釈に、より近いものを示しているとすれば、ジョンは、このような神学的考察を続けながら、それ以後の彼の宣教と牧会活動を展開していったことになる。彼にとって神学思想と宣教実践とは、一つのことの両面、あるいは、表裏にほかならなかった。ここで、オールダースゲート経験以後の、ジョン・ウェスリの伝道活動を概観しながら、活動の源泉と思われる二つの神学的な展開を検討して、拙論を結んで行きたい。

V オールダースゲートの今日的な意義をめぐって

(1) メソジスト運動の宣教と牧会活動

筆者は、上述の通り、1738年以降、ジョン・ウェスリが選び得たであろういくつかの道を、彼が実際には選ばなかった事実に注目した。彼は、再渡米して新大陸での宣教に従事したいという大きな夢と願望を抱きながらも、その道を歩まなかった。また、オックスフォード大学の神学教師としての道にも戻らなかった。そして、ヨーロッパとアメリカという旧新の二大陸を結ぶ宣教の中継地点としてのイングランド・モラヴィア教会の創始者的存在になる道にも進まなかったのである。

では、実際に選んだ道、すなわち、1738年のオールダースゲート経験以後、ジョン・ウェスリが選んだ国内外への宣教の道はどのように展開して行ったであろうか。ヘルンフォートから帰国して半年後の、1739年4月2日、ジョンは友人ホイットフィールドの招きに応じて、これも気乗りせぬまま、ブリス

²⁸ Richard P. Heitzenrater, *op. cit.*, p.147.

²⁹ Richard P. Heitzenrater, *Ibid.* p.147.

トルでの野外説教を始めている。同地にソサエティを設立し、5月12日には、Horsefair 街の New Room 建設の定礎を行なった。この会堂は、世界で最初のメソジスト派チャペルである。また、炭鉱夫の子女のために Kingswood (キングスウッド) 校を開校している。同年 11 月、彼の良き批判者であり助言者でもあった、長兄サミュエルの急逝という大きな試練に出会ったが、同時に、伝道の拠点、ファウンドリの献堂式を行なっている。11月27日には、メソジスト連合会をロンドンで結成した。そして、翌40年7月20日、モラヴィア派指導者モルターの主導権下にあったフェッターレイン・ソサエティ (Fetter Lane Society) と訣別した。1742年、メソジスト会員券の配布を始め、5月28日、イングランド北部地方への伝道の拠点ニューキャッスル (New Castle) 伝道を始めた。6月6日、エプワース (Epworth) 教会で父の墓石の上に立って説教をした。7月30日、最愛の母スザンナを天に送ったが、1744年6月25日には、第1回メソジスト年会を開催するに至った。同8月24日、オックスフォードの聖マリア教会で同教会での最後の説教を行なった。彼を何度かその講壇に招いたこの教会も、遂に彼への門戸を閉ざすこととなった。

さて、このようなジョン・ウェスリを中心とするメソジスト運動は、一体、どのような彼の神学的思考の熟成によって動かされていったのであろうか。それらを二点に絞って述べたい。

(2) 聖霊論神学、すなわち、生命論的神学の構築

オールダースゲート経験が実際にどのような類いのものであったとしても、また、ジョン・ウェスリ自身やモラヴィア教会の人々によって、あるいは、現代教会においてどのように解釈されるにしても、それが「聖霊なる神の御業」であったと信じたい。彼は、聖書に啓示されている三位一体の神を堅く信じた。創造主で父なる神、信仰の創始者、完成者である贖い主イエス・キリスト、すなわち、御子なる神、そして、特に、「いのちの与え主 (Vivificator)」としての聖霊なる神を信じて疑うことはなかった。従って、オールダースゲート経験の意義を問うことは、聖霊による救いと恵みの豊かさを問うことにほかならない。

ジョン・ウェスリの聖霊論神学、換言すれば、「いのちの与え主」を信じる

生命論的神学の形成は、主として、以下のような内容を持つものとする。

- 1) 「救済論の神学」を根幹としており、それに基づく宣教活動であった。
- 2) 義認と聖化の関係、及び聖化の本質を精査する「聖化の神学の明確化」であった。

まず、1) について考えて見よう。ウェスリは、生涯にわたって、聖書から主イエス・キリストの福音、すなわち、「主の救い」の本質をより正しく読み取ろうとした人物であった。従って、彼に取って「神学」とは、主イエスの御言葉の通り、「道、真理、いのち」、つまり、「真実ないのちの道の神学」であり、また、「聖書的な救いの道の明確化」にはほかならなかった。この一点に集中して霊的な巡礼と宣教活動を続け、また、多くの活動を通しながら神学的思索を続けた。彼にとって、神学と宣教活動とは、「変化や成長を伴ういのちそのものの両面」を示すものであったからである。

2) 「義認」や「義認と聖化との関係」に関しては、優れた邦語文献が世に問われている³⁰。従って、筆者は二、三を提起するに止めたい。

(a) ジョン・ウェスリの神学が、イングランド改革者の神学、特に、その救済論、信仰論、信仰と善行との関わりについての見解に多くを負っている点を指摘したい。彼は、生涯にわたって敬愛したイングランド国教会の、義認教理の特色を継承した。特に、トマス・克蘭マー (Thomas Cranmer) の『祈祷書』と『説教集』を尊重したウェスリは、克蘭マー独自の義認論に負う。このような思潮の流れは、彼がモラヴィア派の信仰観や確信観に多くを教えられつつも、ついに同派に一致できなかった事実と深く関わっていると考える³¹。克蘭マーは、その義認論で、「キリストの義、他なる義、転嫁とし

³⁰ 義認論の邦語文献としては、藤本満「ウェスレーの義認論」、『ウェスレー・メソジスト研究』4、11—42頁が出色の研究である。拙論「ジョン・ウェスリの神学的遺産 (I) —信仰義認論をめぐって」、『神学と人文』第28集、第30集所収。また、義認と聖化との関係については、清水光雄、前掲書、163—193頁に教えられる。拙論「ジョン・ウェスリの神学的遺産 (III) —聖化論をめぐって」、『神学と人文』第34集所収。

³¹ ウェスリとモラヴィア教会との出会いを学びつつ、筆者が不思議に思うことの一つは、ジョンと彼の盟友たちとの違いである。たとえば、オックスフォード時代から遠くアメリカやドイツまでも行を共にしたインガム、それにデラモット (Charles

ての義」を強調するが、その強調のあまり、「愛によって働く信仰」、あるいは、信仰と善き業との関わりの重要性を、行為義認への危険を恐れるあまり、切り捨ててしまうようなことはしなかった。

最近のローマ・カトリック教会とルター教会とのエキュメニカルな神学的対話、『義認の教理に関する共同宣言』の論点を考え合わせるとき、また、「宣義（義認）か、義化か」という問いに先鋭化させるだけではない、新しい視点や論点での問いかけが始まっていることを考えるとき、この課題へのイングランド改革者やジョン・ウェスリの貢献を改めて考えざるを得ない。

ウェスリがモラヴィア派の本拠地で経験したことは、確かに霊的な富の豊かさであった。しかし、それと同時に、霊的憧憬の地、ヘルンフォートへの旅において、祖国イングランドとその神学思想の豊かな伝統に思いを馳せたとき、ジョンは、その後の生涯における「イングランド教会の霊的伝統の批判的な継承者」としての使命を認識したのではなかったか。もちろん、ウェスリが自ら背負って、その克服に努めた母教会の霊的危機や弱点も存在したのではあるが、姉妹教会の霊的な富に豊かに触れることを通して、逆に、母教会が持っている霊的遺産の豊かさを再発見したと思われる。

(b) ジョン・ウェスリが義認論を問う場合、それは、義認と新生との関わりを問うことでもあった³²。ウェスリ独自の見解から、義認を法的理解のみに偏って考えることなく、「いのちの関係」において考察すること、つまり、生命論的な神学の枠の中で「聖書的な救いの道」の解明を試みたと考える。新生したいのちは、キリスト者の完全、つまり、全き愛の成熟と完成、聖化

と最後の義認、栄光のいのちへと、救いの完成の道を進んでいく。

(c) 聖化の観点から言えば、ウェスリの神学は、彼自身の霊的な巡礼、及び、メソジストの群れや民衆の宗教生活と密接に関係している。モラヴィア教会が強調する信仰と確信を追い求めれば求めるほど、聖書が明らかにしている信仰や確信は、同派が強調するようにだけ断言してしまえるものではないという考えが、彼の内には起こってきた。ウェスリは、「様々な段階、力量、度合い」という多様性や、「恵みの手段の大切さ」が示す「いのちの変化と成長に基づく歩み」を考えざるを得なくされた。そして、それが、この「一書の人」が理解した「聖書が示す救いの道の多様な全行程」にほかならなかったのである。

(3) オールダースゲート経験の現代的意義をめぐって

第18世紀のイングランドを中心に展開されたジョン・ウェスリのメソジスト運動は、一体、何であったのか。識者によって、その答えは幾通りにも出され得る。「環大西洋世界を背景にした第18世紀イングランドを中心にして、当時、軽視されていた社会階層の中に、福音の救いの喜びと、希望に満ちて現実を生き抜く生命力を満たす価値創造運動、価値転換運動の一つこそ、メソジスト運動であった。」これも一つの答えであろう。

その90パーセント近くが小集会から導かれた人々であったと言われる初期メソジストの群れは、当時の社会で軽視されていた階層の人々が多くを占めていた。当時、極端な予定論的断定を試みる人々から見れば、それらの階層の人々は神の選びから除外されている人々であったことになる。また、ほかの人々は、貧困に苦しむ人々を本人の怠惰のため、当然、落ちこぼれていく人々と考えていた。あるいは、社会正義を論じ貧困者の救済を論じはするが、自分たちは、相手に指一本触れようとはしない知識層も多いた。そのような人々の間にあって、ジョン・ウェスリは出来る限り、貧しい階層の人々と共に生きようとした。ウェスリから学ぶことの一つに、メソジストの相互扶助システムがある。それは富める階層が貧しい階層を、憐憫ゆえに救済するシステムではなかった。

上記の決定論的な考え方や、「貧困は怠惰ゆえに」という見方に対して、

Delamotte)との違いである。マリエンボルンで同派に認められた人物だけあって、インガムは、モラヴィア教会に加わって行った。しかし、後年、スコットランドのある分派に関わるようになって同派から離れてしまう。デラモットはフェターレン・ツサエティまではジョンと共に行動するが、モラヴィア派に属して行った。若い頃、ジョンに心酔していた国教会信徒ジェームス・ハットンも、後にはイングランド・モラヴィア教会の中心的な存在になった。これらの人々と変わらない親交を続けながらも、ジョン・ウェスリは彼らと一線を引いていた。それは母教会への敬愛と愛着だけではなく、ウェスリには、それらの人々以上に、神学的な問題が根深く介在していたと見るべきであろう。

³² 拙稿「ジョン・ウェスリの神学的遺産(II) 新生論をめぐって」、『神学と人文』第32集、第33集、参照。

ウェスリは激しく抵抗した。イングランド、さらには、ウェールズやスコットランド全土の巡回伝道で、実際に多くの貧しい人々と会うことを通して、それらの考え方がいかに誤ったものであるかを、彼は知っていた。そこで、ウェスリは、その伝道の一環として、以下のことにも尽力することになった。すなわち、貧しい人々の衣食住の面での具体的な援助と保護、貸付制度などによる困窮者や中小の起業者の救済と援助、労働階層の就労の増加、内職や技術指導の充実、学校や施設を貧しい大人や子どもに提供すること、出版事業の振興と識字率の向上、医療チームや会堂付属の無料診療所と救急医療の充実など、実に多くの分野であった。これらはメソジストたちが、先ず、自分たちの相互扶助を通しながら、ひいては社会全体に影響を及ぼして行く助け合い運動の実践にほかならなかった。

これらの奉仕活動の根底にあった神学思想は、聖書の福音の豊かさであり、特に「神の像としての人間の尊厳、尊重、敬愛」であった。やがて、これらの貧しい人々自身が、メソジストと呼ばれる人々の群れにあって、あるいは、社会の随所において、責任を負う様々な場を占めるようになり、身心両面（ウェスリの考えでは、時間的には、「身」が先行するが、価値的な順序では、霊的な支え、つまり、「心」が目標であった。）にあって、社会的責任を担う新しい生き方をするようになって行った。抑圧されていた階層に取っては、これは新しい価値創造であり、生きる意義を再発見する貴重な生きさまであった。このような生き方の「個人的で、共同体的なルーツ」は、「いのちの与え主」なる聖霊のいのちそのものであり、いのちの与え主による価値創造であり、価値転換にほかならなかった。従って、オールダースゲート経験から新しい展開を見るようになった「主イエス・キリストの福音の証し」が、ここにその輝きを増したと言うべきであろう。

（追記） 本小論の考察のきっかけは、**2004年5月24日**、日本キリスト教団鳥居坂教会で開催された更新伝道会のウェスレー回心記念集会において、「信仰の確信に満たされて——ウェスレー回心の現代的意義」と題して行なった筆者の講演の準備によって与えられた。このような機会を与えてくださった更新伝道会に対して、改めて謝意を表したい。

（日本フリーメソジスト西田辺伝道所牧師）